

当協会が管理する施設に備わる宮崎ゆかりの絵画作品の価値の再評価について

協会事務局 経営戦略課 学芸員 上脇啓子

研究成果の概要：地域密着型の画家である弥勒祐徳氏の作品価値を制作理念から再評価し、当協会における必要性や活用法、また、適切な管理方法について研究したものの。

1. 研究の背景

以前みやざき歴史文化館に行った時、ロビーに坂本正直氏の作品が飾ってあったが、その場所は自然光や外気が入り、展示するには、条件が悪いと感じた。

坂本氏は、作品が県立美術館に所蔵されるなど、著名な郷土作家の一人である。作品の文化的な価値は高いと考えられる。同じく、弥勒祐徳氏も著名な郷土作家であり、その作品もみやざき歴史文化館の収蔵庫に保管はしてある。

特に弥勒氏は「神楽」や「佐土原人形」など、地域文化をテーマとした作品を多く制作されており、みやざき歴史文化館だけではなく佐土原歴史資料館にも多数作品は所蔵されているということである。「宮崎市歴史資料館条例」第3条(1)にもあるとおり、歴史、民俗、神話等に関する資料を収集し、保管し、展示し、及び公開することを事業の一つとする当協会において、その作品を調査・保管し、整理することは、文化財を適切に管理し、守るという観点から見れば、急務であると考えた。

2. 研究目的

「当協会が管理する施設に備わる宮崎ゆかりの絵画作品の価値の再構築」とする。

調査・整理し、価値を再評価することで、作品に対する市民からのニーズを生み出すことができる。また、価値が再評価されれば、作品管理も見直され、文化財を守るという観点や、企画展として提供するという形で、市民サービスの向上に貢献できると考える。

3. 研究の方法

坂本氏、弥勒氏の両名とも調査は必要であると考え、坂本氏は既に亡くなっていることを考慮すると、今回は制作者本人から取材が可能である弥勒氏について調査・研究したいと考える。

- (1) 作者への取材と文献調査（制作理念）
- (2) 館所蔵作品数と保管状況の調査
- (3) 本人作品保管状況の調査
- (4) 保管法の文献調査
- (5) 今後の作品活用と管理計画の提案

4. 研究成果

- (1) 作者への取材と文献調査（制作理念）

作者に制作の理念について伺ったところ、「生きた絵を描くこと」と回答された。それには、「木喰仏」との出会いが深く関係していたようだ。

「木喰仏」をつくった木喰上人とは、56歳で日本廻国修行に旅立ち、以後27年もの間全国を巡り、各地におびただしい数の仏像を残しながら生涯難民を救うことに終始した江戸時代後期の仏教行者・仏像彫刻家である。西都には9年もの間日向国分寺住職として滞在し、炎上した国分寺の再建を果たした。その日向国分寺跡に建つ「木喰五智館」に、木喰上人のつくった五智如来像が安置されている。



五智如来像

彌勒氏が絵を描き始めたころ、この木喰仏をモデルにしてデッサンの練習をされたそうだ。

「デッサンの勉強をしようと思ったが(モデルになる)人がいない。そこで中学生のころ学校の帰りに寄っていた国分寺の『五知如来』を描いたのが初めてである。これが木喰仏とは知らなかった。描いているうちに木喰仏の魔力に惹かれ、30年間も描き続けることになった。」この、木喰の魔力について考えることは、「何度も何度も描いてみるが、同じ仏像でも同じ形にならないのは不思議だった。」また、「後にある人が…こんな仏さんは見たことがない、動いている、いくら描いても同じように描けないのは動いているからだと言われた。」とあるように、この、木喰の魔力について考えることは、「生きた絵を描く」という制作理念を理解するヒントとなると考える。彌勒氏は生=動と捉える。生のエネルギーを「動いている」と表現されている。

彌勒氏が60歳を迎えたころ、木喰の足跡を辿ることを思い立ち、北海道の江差を訪ねたそうだ。

「木喰が最初に彫った仏像のある江差^{えさし}を訪ねた。そこで見たものは、エネルギーの塊のように見える、仏像とも丸太ともいえない地藏尊であった。」その時の様子を、こう著書に書かれていたが、木喰仏の魔力の正体は、木喰上人が仏像に込めた生命感やエネルギーであり、それらを表現することこそが、彌勒氏の制作理念であるといえる。

また、佐土原人形を描くことについてもこう語っている。

「もう100年以上は経った人形が語りかけてくる。言葉ではないが、じっと顔を見ていると表情が変わってくる。それは一瞬の出来事で、…もう一度描こうと思っても描けない。」

土偶や埴輪についても同じことが言えるとおっしゃっていた。

彌勒氏はまた神楽も描かれる。そのことについてもこう記している。

「神楽も、そのエネルギーを描くことで人を惹きつけ、それを描くことで動きが生まれ、生へと変わるのだろう」また、「この地方の神楽が何百年と続くのは、神楽の中に秘めるエネルギーがあったからこそ今日まで舞い続けられたのである。そのエネルギーを伝えるためにも、描き続けなければならない。」

彌勒氏の制作理念はアニミズムから始まり、まさに文化の根源を見つめ、それを絵画という形で継承するということにあると言える。

(2) 館所蔵作品の調査

—作品保管施設と作品数—

宮崎市所有 (みやざき歴史文化館蔵)

油彩 20点

佐土原歴史資料館所有 (同蔵)

油彩 46点

水彩 38点

企画展終了後水彩約50点を追加

—作品保管状況—

両施設とも他の文化財とともに収蔵庫に保管されており、温湿度管理がされていた。

みやざき歴史文化館はそのままの状態で縦に並べられており、佐土原歴史資料館は新聞紙に包んで同じく縦に並べられていた。

歴史資料館に以前飾ってあった坂本先生の作品は、その後紫外線防止フィルムがガラス面に貼られ展示され、現在は収蔵庫に戻されていた。

みやざき歴史文化館に関しては、宮崎アートセンターに収蔵庫がないこともあり、館ではなく宮崎市所蔵の物も混在している形になっており、その所有について曖昧な状況が窺えた。そういった状況が不適切な管理に陥る危険性を孕むと考え

る。そうならないよう、文化財の重要性を理解し、愛情を持って適切に管理しなければならないと感じた。

また、これらの状況を見て、収蔵庫で様々な素材の文化財を同じように管理していることや、館ごとに保管の方法が異なることに疑問を持った。例えば、新聞紙で包むことがよいのであれば、情報を共有し、同じように管理するべきではないだろうか。

両施設の保管状態を踏まえ、作品について、どのような情報が必要かを十分考え、管理法を提案する必要があると感じた。

(3) 本人作品保管状況の調査

彌勒氏がご自宅近くに「神楽館」という名称の美術館を建てていらっしゃるということで、展示、保管状態の調査に伺った。

美術館として建てられたそうだが、今まで描かれた作品でデッサンが2万点、絵画の100号サイズが150点、その他小品が1000枚と、あまりに数が膨大で、現在は倉庫として使われているようであった。

遮光には気を遣った造りになっているようであったが、温湿度管理がなされていないかった。

また、著書の「中間が私の描いた『蛾』の絵を欲しいと言って持って帰ったのだが、翌日になって絵から泡が噴き出している、お前の絵は恐ろしいと言って返しにきた。絵の具の胡粉が足りないので小麦粉を混ぜたのが発酵したのだ。」

という部分からわかったのだが、絵の具の嵩を増すために小麦粉を使用した時期があるらしく、生物被害の面でも問題があると感じた。

当協会で彌勒氏の作品の収集方針を決め、重要な作品はこちらで適切に管理し、守っていく必要があると感じた。



神楽館外観



神楽館内部



「蛾による構成」

(4) 保管法の文献調査

元々この研究を始めようと思った動機も、絵画作品の展示場所に不安を感じたためであった。

近年、「プレベンティブコンサーベーション」という考え方に基づいた、予防を中心とした管理・保存法が提唱されている。従来の「壊れたもの・傷んだものを修理する」という事後処置的な対応から、むしろ「壊れない・傷まないように予防する」ことに重点をおく対応に変化してきたということである。

文献の「博物館における保存科学」という部分より、以下、管理に重要と考えられる部分を抜粋している。

文化財をとりまく様々な環境因子のうち、博物館の屋内展示・収蔵を考えると、特に重要となるものは次の5つである。以下重要と考えられる部分を抜粋しつつ考察する。

- ① 温度
- ② 湿度
- ③ 光
- ④ 空気汚染
- ⑤ 生物被害

これに輸送中の環境、災害、より社会的な因子を加えると文化財をとりまく環境因子の大枠が整理される。

- ⑥ 振動・衝撃
- ⑦ 災害・戦争

気をつけなければならないことはたくさんあるが、今回は、温度、湿度、光の3つを特に調べてみようと思う。

・温湿度

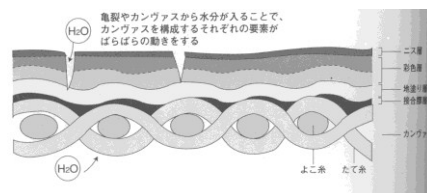
資料の材料や状態により変わらうが、収蔵庫、展示室の温度環境は、一般的には温度20℃前後、湿度50～60%程度が推奨される場合が多い。下の表が、資料別の望ましい相対湿度となっている。

(博物館資料のための望ましい相対湿度)

資料	材料・状態・留意点	RH%
紙	専門家によっては、より低湿度を薦める。	40～50
張力のかかっている紙	屏風類、引張フレームに張り込んである素描。(相対湿度変化を少なくすること)	40～55
キャンバス画	下地層のないものあるいは親水性の下地のものは、ワックスや合成樹脂による下地のものに比べ、湿度変化に反応しやすい。	40～55

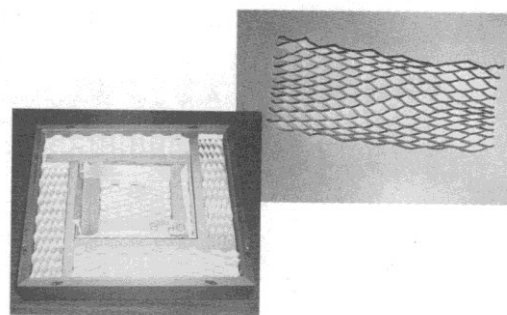
また、一概にこの湿度であればよいということでもなく、資料が置かれている環境を急激に変化させないこと、つまり、急激な温湿度の変化も割れや結露の原因となるので、避けなければならないということも重要であった。

下の図はキャンバスの断面図である。湿気により構成する様々な物質が様々な動きをし、崩壊に至る。



湿気によるひび割れの例 (キャンバス)

また、一定の湿度を保つ機能を持つ、SHCペーパーという紙も開発されている。調湿紙と美術作品を密閉性の高い状態にし、額に入れ込むことで、一定の湿度を保つことができる。下の写真は、ハニカム構造にしたSHCペーパーを額に入れたもの。



「SHCペーパー」

・光

「資料に光を当てるのは、鑑賞・研究・状態調査等の必要からで、保存性を考えれば最低限にとどめる必要がある。」
 という事である。

直射日光に当てるなどは、以ての外で太陽光に含まれる紫外線は退色をまねき、赤外線は資料表面の温度上昇、乾燥を引き起こす。これらは人口光にも含まれる。紫外線は蛍光灯に、赤外線は白熱灯に含まれる。それらをカットするフィルムを貼るのは絵画を守る上で有効な手段であるといえる。また、次の表のように推奨照度も参考にしたい。

	ICOM (1977)	証明学会 (1970)
光に非常に敏感なもの (1)	50lx できれば低いほうがよい。 (色温度約2900K)	50lx
光に比較的敏感なもの (2)	150～180lx (色温度約4000K)	150lx (1日8時間、年間300日で積算照度 18000 lx・h)
光に敏感ではないもの (3)	とくに制限なし ただし300lxを超えた照明を行う必要はほとんどない。	とくに制限なし 実際には展示証明効果と輻射熱を考慮する必要あり。

(博物館展示照明における照度の推奨値)

- 1) 染色品・衣装・タピストリー。水彩画・日本画・素描・手写本・切手・印刷物・壁紙・染色した皮革品・自然史関係標本
- 2) 油彩画・テンペラ画・フレスコ画・皮革品・骨・角・象牙・木製品・漆器
- 3) 金属・ガラス・陶磁器・宝石・エナメル・スタンドグラス

(5) 今後の作品活用と管理法の提案

事実を文字や言葉で伝えることはもちろんだが、彌勒氏の作品には、そのエネルギーをも後世に伝える得る貴重な財産である。美術館は、造形的な視点から美術作品として展示をする。もちろんそういった価値も十分備えている。しかし、当協会では、多くの人への地域文化の継承という意味においても価値を見出したい。絵画作品はダイレクトにそのエネルギーや魅力など、文字や言葉では伝えきれない部分を伝える。そういったテーマの企画展を開催したい。

また、管理に関しては、共通フォーマットに基づき整理するのがよいと考える。必要であると思われる情報は以下の通りである。

- ・作者 ・題名 ・制作年
- ・受け入れ年月日・寸法
- ・写真（画素数の高いカメラ使用）
- ・寄贈・寄託・購入の別（どこに対して）
- ・展示回数・時間・場所
- ・素材 ・洗浄・修復の経緯

- ・取扱い注意事項（その都度記入）
- ・管理者名（管理期間も記入）

このように、彌勒氏の作品の価値を再認識し、適切に管理していきたいと考える。

5. 参考図書、論文等

〔図書〕（計4件）

- ① 彌勒佑徳、石風社、絵が動く 2012.08
59、66、67、136、137、140
- ② 日経アート編、日経BP、社美術品を
10倍長持ちさせる本、1996.3
176-178
- ③ 君塚仁彦・名児耶明編、有斐閣ブックス、現代
に生きる博物館 2012.12、140-146
- ④ 福富健男著、江南書房、民俗画家彌勒祐徳、
2009.4